

青森県画譜における考古資料について

伊藤由美子¹⁾

Report on Archeological artifacts about “Pictures of Aomori prefecture”

Yumiko Iro

Key words: 青森県画譜、今純三、佐藤薊、成田彦栄氏考古資料

1 はじめに

今純三が描いた『青森県画譜 第12集』の「先住民俗遺物図絵」には、佐藤薊が収集した考古資料が描かれている。青森県画譜には今純三が考現学的な視点でとらえた自然物や建築物などが描かれている。その中で、考古資料を描いた「先住民俗遺物図絵」は、若干異色ともいえる。スケッチされた考古資料は、全て縄文時代の遺物であり、これら描かれた資料のほとんどが佐藤薊の死後、成田彦栄氏に渡り、「成田彦栄考古資料」として弘前大学に保管されていることが明らかになった。青森県画譜に「佐藤薊の蒐集品」（成田彦栄氏考古資料）が描かれていることがあまり知られていなかったため、画譜に出土地が記載されていたことで、これまで不明であった資料の出土地が明らかになった場合もある。

2 「先住民俗遺物図絵」について

昭和9年（1934年）に製作された『青森県画譜 第12集』の「先住民俗遺物図絵」には、佐藤薊が収集した考古資料23点が描かれている。スケッチの横には大きさ、出土地などが記載されている。図中の資料名、出土地などを表1にまとめた。スケッチされた資料は、東青、中津軽、三戸などから出土し、蒐集品が県内全域に及ぶことがわかる。

今純三は解説文に「有史以前我が本土、北海道、樺太等には所謂石器時代の原人の棲息して居たということは彼等の遺跡、遺物によって明らかなることである。この住民の遺跡即ち『貝塚』『堅穴』その他の遺物包含地散布地が本県に相当に多いのは大和朝廷の文化の及ぶのが甚だ遅かったために、その破壊せられることの少なかったためであろう。貝塚は西津軽郡、北津軽郡、東津軽郡、上北の各郡内に相当の数があって、其処には貝殻外に石器や縄紋式土器が包含されて居る。堅穴では西津軽郡森田村に合計八十五箇所程、明治三十年に発見されたのは著名なことであるが、この外に上北、北津軽郡の各都に多くのものがあり、弥生式土器その他が出る。遺物包含層としては西津軽郡館岡村亀ヶ岡と三戸郡は川村中居とは顕著である。その他県下到处に『遺物散布地』があつて種々珍奇な遺物が出土する。」と書き、現在の石神遺跡（つがる市）、亀ヶ岡遺跡（つがる市）、是川中居遺跡（八戸市）を紹介している。当時は現在ほど考古学や遺跡というものが一般に周知されず、この画譜により広く一般に遺跡や考古資料を紹介した役割は大きい。

3 考古学と考現学

今純三の兄である今和次郎は、「考現学」（モデルノロジオ）を提唱した。「モデルノロジオ」（考現学）は、古代の事象を扱う「アルケオロジ」（考古学）に対し、現代の事象を扱う学問として今純三の兄である和次郎が造った言葉である。今和次郎は論文「考現学とは何か」で、「考現学」と称したかったのは、考古学に対立したいという意識からである。古代の遺物遺跡の研究は、明らかに科学的方法の学たる考古学にまで進化しているのにたいして、現代のものの研究には、ほとんど科学的になされていないうらみがあるから、その方法の確立を試みるつもりで企てたのである。

考古学とは何か、ということはこちらにあえて多くをいわなくてもいいであろう。浜田博士によれば（『通論考古学』）、考古学は過去人類の物質的遺物（により、人類の過去）を研究する学なりといわれ、そうしてなんのためにということは漠然としていて、考古学はひとつのまとまりたる内容を有する科学というよりは、むしろ物質的な資料を取扱う科学的研究方法というを当たれりとし、この方法によって研究せんとするところはいかなる方面にても可なりとし、各専門家は各自の扱わんとする資料を考古学的研究方法で行って、各自それぞれの効果を収めうる事ができるといわれている。そしてそれは史学と交渉してはじめて、考古学そのものの価値が発揮される、つまり史学の補助学としての価値あるものといわれている。考現学が対象とするのは現在我々が眼前に見るものであり、明らかにしようとするのは人類の現在の状況である」と説明している。

日本の近代考古学は、動物学者であったエドワード・モースによる1877年（明治10年）大森貝塚の発掘調査が始まりとされ、モースがもたらしたヨーロッパの考古学は、客観的に資料を読み取ることを基礎としていた。当時の日本では、「記」「紀」に基づく神話の歴史観（皇国史観）に基づいた天皇制絶対主義国家の成立期にあった。そのため考古学により先史の解明が進むと、皇国史観と対立する可能性があり、社会的に政治的に厳しい制限が加えられていた。その中で、浜田耕作はヨーロッパに留学し、モンテリウスに師事し客観的な実証主義の考古学を日本に持ち込んだ。その著書が「通論考古学」である。しかし、今和次郎の文中にもあるように考古学は皇国史観によって学問の自由な発展を阻まれ、「史学の補助学としての価値あるもの」とされ、現在のように独立した学問としては成立していなかった。

1) 青森県立郷土館 学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

4 今純三と佐藤蒞

解説文から純三も兄和次郎と同様に浜田耕作『通論考古学』などを読み、考古学がなんであるかということは知っていたと思われる。さらに、純三は大正12年に東京から青森へ移った際、住んだ家のすぐ近くに佐藤蒞の家があった。また当時、佐藤蒞の考古画譜や植物画について知られており、蒞の画力にも魅せられたのかもしれない。ほどなく純三は佐藤蒞の家を訪れるようになったという(註1)。

佐藤蒞の考古学との出会いは、明治12年頃親戚から贈られた亀ヶ岡遺跡出土の土器片に魅せられたことがきっかけであったという(『東奥日報』1928年11月15日掲載「蒐集漫談(9)」)。明治19年当時唯一の考古学の全国学会であった東京人類学会に入会、明治20年代東京人類学会初代会長の神田孝平らに亀ヶ岡遺跡発掘調査を案内した。その後、考古学的報文を「東京人類学雑誌」などに積極的に投稿していた。また考古資料の蒐集家を訪ねては、遺物のスケッチを行った。そのスケッチは写実に徹していた。佐藤蒞は遺物を介してそれを生み出した人々を知ろうとする姿勢、すなわち近代的な考古学が身につけていた(関根2009)。

今純三と佐藤蒞は家が近所であるだけでなく、学問的な結びつきも深かったと推定される。その結果がこの画譜であったかもしれない。解説文の冒頭の「有史以前我が本土、北海道、樺太等には所謂石器時代の原人の棲息して居たということは彼等の遺跡、遺物によって明らかである。この住民の遺跡即ち『貝塚』『堅穴』その他の遺物包含地散布地が本県に相当に多いのは大和朝廷の文化の及ぶのが甚だ遅かったために、その破壊せられることの少なかったためであろう。」は、現代ではごく当然の事であるが、当時では画期的な文であり、皇国史観に対するとらえられてもおかしくない文書でもある。

今純三にとって、この画譜は県内にある遺跡の発掘品(=古くに住んでいた人々の証)のコレクションを「採集」したということであるかもしれないが、その視点には図らずも近代考古学的な視点も含まれていた。

表1 青森県画譜に描かれた資料の名称及び出土地など

番号	作品(資料)名	制作年	寸法	画譜に書かれた出土地	資料番号
1	石棒	縄文後期後半	57.3×4.4	三戸町西越	図35-256
2	独鈷石	縄文時代晩期	18.0×4.6	中郡高杉	図33-250
3	磨製石斧	縄文	32.7×5.5	—	図31-238
4	石刀	縄文		東郡四茂木野	センター所蔵
5	石冠	縄文		—	画譜Ⅲ-284 センター所蔵
6	壺形土器	縄文晩期	9.9×4.8	西郡亀ヶ岡	図8-63
7	注口土器	縄文晩期	8.9×14.7	高杉	図16-136
8	鉢	縄文後期後半	10.7×13.7	中郡十腰内	図3-24
9	注口土器	縄文後期後半	15.4×5.3	南郡尾崎	図4-30
10	壺形土器	縄文晩期	17.6×8.5	東郡新城	図12-100
11	スタンプ形土製品	縄文後期中葉	7.5×4.6	—	図26-188
12	土偶	不明		高杉	センター所蔵
13	土偶頭部	縄文晩期	(8.6)×(6.8)	—	図22-176
14	土偶頭部	縄文後期	(5.7)×(5.2)	—	図19-167
15	土偶	縄文晩期	(17.5)×(23.2)	東郡新城	図20-170

※ 資料の番号は図2の画譜内の番号及び写真図版の番号と一致する。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、弘前大学人文学部上條信彦准教授からご指導を得た。また、對馬恵美子、三上強二氏から貴重なご教示をいただいた、記して感謝申しあげる。

(註1) 三上強二氏の教示による。

引用・参考文献

- 今 和二郎 1930 「考現学とは何か」
 弘前大学人文学部付属亀ヶ岡研究センター 2009 成田コレクション考古資料図録
 弘前大学人文学部付属亀ヶ岡研究センター 2009 佐藤蒞 考古画譜 I
 青森県立郷土館 2011 今純三 絵草紙



図1 青森県画譜「先住民俗遺物図」

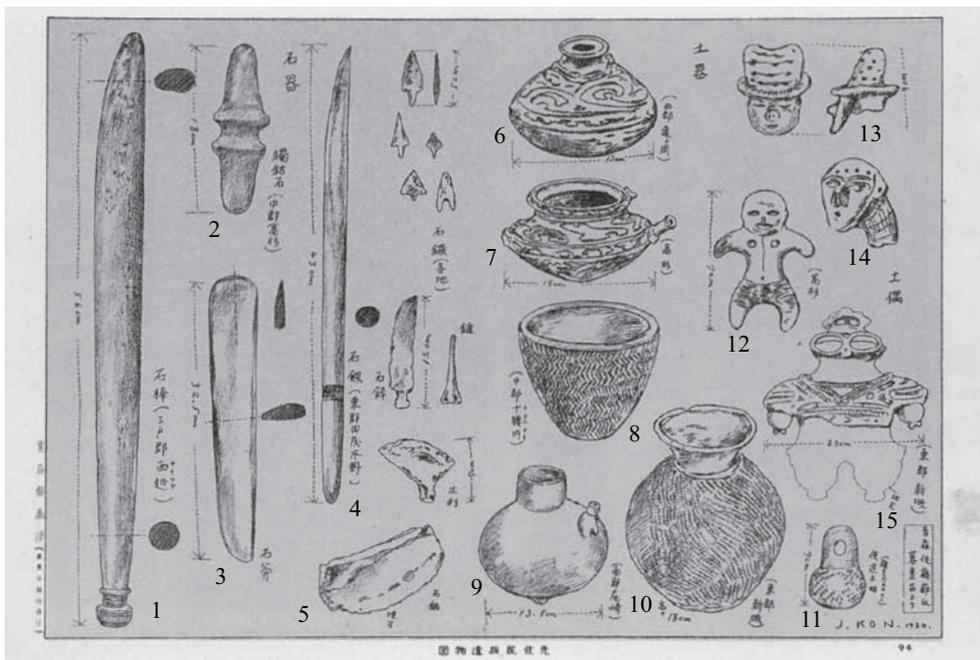


図2 「先住民俗遺物図」資料番号入り

※資料下部にある番号は、表及び写真図版と一致する。



撮影 小川忠博

写真1 写真右から4番目の資料



撮影 小川忠博

写真2 写真左上の資料



撮影 小川忠博

写真3



撮影 小川忠博

写真6



撮影 小川忠博

写真7



撮影 小川忠博

写真8



撮影 小川忠博

写真9



撮影 小川忠博

写真10



撮影 小川忠博

写真11



撮影 小川忠博

写真13



撮影 小川忠博

写真15